

#### 4 回目のポーツマス

2月8日（木）

2月2日（金）の夜、長男、啓のアパートに到着した時、日本人の私を意識してか、マヤはアイウエオの積み木を並べていて得意顔でした。

4歳になり、よくしゃべるようになりました。大人の話聞いていて、すぐに真似したり、反応します。この年齢の子供はそうやって言葉を覚えていくのですね。フェデリカが留守の時に、啓の髪の毛に洗濯バサミをたくさんくっつけて遊んでいました。日本のより長くて木製なので、

「啓、花魁みたいね」と笑ったところ、マヤはすかさず

“He looks like オイラン”

と「オ」にアクセントを置いて言いました。この時ブザーが鳴って、荷物受け取りとなり、啓は慌てましたが、このような時のために私がいました。

日本語は（イタリア語も）、聞いて理解するだけで、発話はもっぱら英語です。夕飯時、言葉遊びが始まりました。

“Thank youuuuu. ダディも言って”

「ありがとう~~~~~う」

「パーちゃんも」

「ありがとう~~~~~」

「マミーも」

“Grazieeeee”

ここで大笑いします。

“今度は2回言うのよ。Thank you thank you. はい、パーチャン”

「ありがとうありがとう」

“今度は速く言うのよ”

“今度はできるだけ遅くね”

いろいろな指示が出てきます。そのたびに大笑いしていました。三か国語が家庭の中で飛び交うのを当たり前としています。

9歳くらいの男の子、女の子が自分の出身国の料理を作るというテレビ番組がありました。

「そう言えば、中学校の家庭科で男子と女子は違うことを習ったなあ。料理らしいものは小学校の時、男女ともサラダのような簡単なものを作ったなあ。お茶の淹れ方がまず最初だったかなあ」と啓。

「緑茶ね」とわたし。

「いや、ブラック・ティーだよ」

「え？ ブラック・ティー？」 どうして緑茶でなかったのかしら？

ここでマヤが啓と私に言います。ちゃんと話を聞いていました。

“Black tea と言ってみて “

「Black tea」と言った私に

「パーちゃん、おかしい」

日本語の「ブラック・ティー」に近く、やっぱり L の発音がおかしかったのね。

「マヤ、パーちゃんの英語、ヘン？」

「イエース」がすかさず返ってきました。

この子供番組では、オリーブやニンニクなど食べ物の素材を他の国出身の子供たちに味見させます。「ウエー」と嫌な味だと反応した子供たちが、出来上がったお料理のおいしさに驚き、苦手だと思った素材を見直します。これは、食物の素材を他人種の人ととらえてもよいような立派な他文化理解だと思いました。

子供番組には、異なる人種の司会者、子供たちが登場してきます。また障害のある子供たちがよく出てきます。昨日は車椅子の子供たちがスケートリンクで滑っていました。スケーターに車椅子を押してもらっているの、自ら滑っているわけではないにしても、スピードを楽しんだことと思います。ちゃんと靴をスケート用に履き替えていたことが印象的でした。今日は、車いすに乗った男の子たちは蝶ネクタイ、女の子たちはドレスを身につけ、ダンス・ホールでダンスをしていました。大きな円になったり、二人一組でぐるぐる回ったり、車いすの操作が難しい子には補助する大人がついていましたが、子どもたちは嬉しそうでした。この子供たちの両親も嬉しかったでしょう。本格的なダンスホールってこんなに素敵なのね、と思いましたが、そのような一流の場所でのダンスを子供たちに体験させていたことが心に残りました。

テレビを見ていると、こちらの子供たちの発言、ジェスチャーが大人びていることに、日本との違いを感じます。マヤもいっばしの大人のような雰囲気を持つ時があります。6日から熱があって保育園をずっと休んでいて、私と二人だけの時間が増えました。熱があっても食欲は落ちておらず、イチゴをたくさん食べました。

「マヤの **pancia** (イタリア語の『お腹』) はイチゴでいっぱいね」

私を一瞬、じろっと直視してから言いました。

「パーちゃんはイタリア語の人じゃないの！ 日本語！」

「はい、はい、ごもつとも」立派な大人から意見されたような気持ちになりました。

言葉だけでなくジェスチャーも私には物珍しいです。何回も獣医さん(この仕事は子供に人気があるそうです) ごっこをして、子犬の飼い主の役だった私はへとへとになりましたが、獣医さんとしてのスペシャリストのマヤは威厳があります。この子犬は薬が苦手、注射は大嫌いのごねる飼い主の私を説得する際のジェスチャーは自信に満ちていました。「注射はす

ぐにすみますから。薬の後すぐに水を飲ませますから大丈夫です」

「脈拍はどうでしょうか？」

「パーちゃん、さっきこの質問したじゃない」

もう頭が朦朧としてきた「飼い主」でした。

自動車を走らせる遊びをしていたとき

「運転手さんはどこに座っているかな？」と言った私に

「あのね、これは pretend しているのよ。本当の人は乗っていないの」大人が子供を諭すようでした。

こちらには、子供を幼い子供として可愛がりながらも、大人のような一人前の人間としても扱うという文化があるという気がします。

マヤはこの秋から同じ敷地内のグラマースクールに入学します。4歳でもう学校とは！先日、その1年生の教室を啓は見せてもらったそうです。

「壁の張り紙には文学について書いてあってね、びっくりした。作家はどのようなコンセプトで作品を書くのか、メタファーが何であるか、などまで書いてあった！」

「大人に読ませてもいい感じの内容？」

「そうだよ」

このような教室で時間を過ごしたかったなあと、幼い内容のものばかりをあてがわれた自分の子供時代を思い出しました。書かれた内容が何であるか今は理解できなくても、文学の高みがおぼろげながら子供たちの意識の中に入ってくるかもしれません。

そう言えば、出発一週間前のスカイプでのマヤも見ものでした。なにか屁理屈をこねて父親の啓をてこずらせていました。

「マヤの言うこと違うんじゃないか？」

“Well, I know I’m not joking.”

いっばしの大人のようにでした。日本の子供だったら、「本当だよ。本当だってば！」と頑張るところでしょうが、マヤのセリフには「私は」が2回も入っていることに気がつきました。夫に言いました。

「日本語には『私は、僕は』が入らないけど、マヤは2回『自分は』と言ったのよ。自分中心という感じがするけど、でも、他人がなんと言おうと自分の話すことに責任を持つんだという意識がそのうち生まれてくるかしら。そうだといいけど」と私が言ったところ、夫の反応です。

「日本の子供は相手と違う意見を持つと封じ込められることが多いね。『みんな、そう言っているよ』とけんかの相手に言われて、そこで議論せずに終わってしまう。国会の野党議員が『こういうことでは国民の納得が得られません』と与党を追及するのはおかしいんだよね。『みんな、そう言ってるよ』と同じになってしまっ、自分はどういう理由でこれに反対か、賛成か、自分の責任で意見を言い尽くすということがないからね」

2月10日（土）

今日は土曜日なのに、フェデリカは大学のオープン・デイなので、出かけました。学校見学に来る高校生の親たちの質問に答えるそうです。昨日、啓は朝早く家を出て、まず勤務先のバスに行き、仕事を済ませ、証券会社でインターンをしている学生に3時に会うためロンドンに行き、夜、ポーツマスに戻ってきました。学生は高い月謝を払っているのに、大学にとってはお客さんだからと、サービス提供をしなければならないそうです。本来の研究に時間が多く取れなくて、残念そうです。これは日本も同じでしょう。

教育の現場で、お金のやり取りが本来の教育のレベルを下げてしまうのは残念です。お客さんの学生にわかりやすいように、退屈させないようにと、難解なことを教えるのを避けてしまう傾向にあるそうです。お金は人の生き方を変えてしまうのですね。マヤの保育園から最近お知らせがあったそうです。遅い時間に保育園のお迎えに来る親に困っての決断だったでしょうが、これからは15分遅れると5ポンド支払わねばならないそうです。啓が言うには、どこかの保育園でも同じことをやり、結果として、それまでは親たちは少しでも遅れると申し訳ないという態度だったのが、お金を払えばいいのじゃないかと、遅く子供を引き取りに来る親が増えたのだそうです。

2月12日（月）

こちらに来て、10日になりました。朝6時半ごろでもまだ真っ暗です。先週は火曜日からずっと保育園を休んだマヤですが、今日は行けそうで、ほっとしています。「窮地にある私を救い出す」スーパーマンごっこ、獣医さんごっこ、美容院ごっこ、魚釣りの遊び、自動車、電車を走らせる遊び、折り紙（紙が立体的なものに変化するのをとても喜びました）などをやっても、まだ二人だけの時間が続きました。フェデリカが言うには、英語だけの子供たちより話すのが遅れているようで、保育園ではストレスを感じているのかもしれない。時々、家で強情を發揮して困らせませす。この一週間が無事に過ぎますように！



## 写真 1. 焼きそばを食べているマヤ

2月12日（月）

午前中、サウス・シー・ショップスという繁華街に買い物に行き、バス停前の NatWest 銀行に入りました。こちらに来て初めて買い物に出た時、往復のバス代は昨年 £2.70 だったので、£3 で充分だろうと £1 硬貨 3 枚を出したところ、これは古くてもう使っていませんとドライバーさんに言われ、慌てて £5 札を出しました。それももう使っていないそうで、銀行に行って新しいのと替えるようにと言われたのです。義姉から旅行で使い残したお札やコインを頂いていて、今回全部使ってしまおうと思っていたのです。このやり取りのために他の乗客を待たせて恐縮したのですが、ここはそのような心配はしなくてよい所でした。バスに乗り込む時、時間の感覚が違うなあと思います。バスの前方一か所から乗客が降りてから乗り込むのですが、ポーツマス一年目では、乗り込もうとしてドライバーさんに制されたことが 2, 3 度ありました。みんな降りたと思ったのに、ゆっくりゆっくりと入り口に歩いてくる人がまだいたのです。私はどうしていつも急ぎ、あわてて行動するのかしら？

銀行に入ってみて、「え？ これ、銀行なの？」と見まわしました。大手の銀行なのに殺風景です。窓口の他に何もなく、なるほど ATM は銀行の外にあれば中になくてもいいのだと気がつきました。日本では若いきれいな女性が窓口で、そしてその後ろに男性の行員が控えていて何人も人が働いていますが、ここでは中高年の女性が窓口で二人いるだけです。5, 6 人ほどの列につき、私の番になりました。

「この銀行の口座をお持ちですか？」

「え？ 口座を持っていなければ、替えられないのですか？」

というやり取りで終わってしまいました。ということは外国からの旅行者は新札に替えられないのですね。

午後、ゴードンさんのところに遊びに行きました。一週間保育園を休んだマヤと付き合い、大人の会話がしたくなったのです。いつものように出てきたお茶とチョコレートビスケットの横に、サマセット・モームの分厚い本がありました。昔の、上品な言葉遣いやその時代の人たちの振る舞いが懐かしくて、時々読み返しているということでした。学生時代、英語の授業に教科書として読んだことがありましたが、イギリスのその時代の文化など説明されてもあまりに遠い世界で関心が持てなかったことが思い出されました。

どういわけか、この日の『デイリーパラグラフ』紙の猩紅熱についての記事に話がうつりました。今、大流行しているそうです。

「そうそう、マヤも昨年末にかかって、クリスマス前の 12月24日に病院に行ったんですよ」

イタリアのフェデリカの叔母・アンナさんは小児科なので、マヤの喉など目視できなかったのに、すぐに大きな病院に行った方がよいといってくれたそうです。新聞記事には若い医者がこの病気についての知識がなく、普通の風邪と扱われて重症になるケースがあると書かれていました。今は抗生物質を 6 時間ごとに飲むことによって感染すら抑えられる

そうです。

病院でのマヤの治療費及び抗生物質の薬代は無料だったそうです。そう言えば大人の場合、風邪くらいでは看護婦さんからのアドバイスはあってもなかなか GP（開業医）に診てもらえないところ、子供の場合はすぐに GP に診てもらえるそうです。でも、今日の新聞には、子供が病気になった場合、すぐに GP ではなく薬屋さんに行きましょうという NHS（国民健康サービス）からのアドバイスが載っていました。それによって、患者の待ち時間が短くなり、税金で賄われている NHS の負担が減るということでしたが、親も薬剤師も医者ではないのだから、という批判も紹介されていました。猩紅熱にかかったかどうかの判断は、啓もフェデリカもできなかったのですから、この反対の声に納得します。

でもどうして根絶したと思われていた病気がぶりかえしてきたのでしょうか？ 新聞記事には猩紅熱にかかった子供が寝ているヴィクトリア時代の挿絵がありました。

「どうしてこの子は額に包帯を巻いているのでしょうか？」

「水と酢を染み込ませた布で頭を冷やしているのですよ。僕の幼かったときも、母親がそうやって額や背中を冷やしてくれましたよ」というゴードンさんの説明でした。

「昔は氷の入手ができなかったのですね。冷蔵庫がなかったから」

「そうそう、子供のころ、坂の斜面に我が家があり、地下室の壁の向こうは地面なので涼しくて、夏などは、大きな容器に水を張って、そこに果物などを入れて冷やしていましたよ」

続いて、ゴードンさんの15年くらい前の中国旅行の話になりました。中国の昆明（雲南省）でカフェに入ってお茶を飲んでいたところ、前方の壁にチャーチルの写真が貼ってあったそうです。

「びっくりして後ろを見たら、ルーズベルトの写真でした」

「え？ 中国の指導者の写真ではなくて！」

「第2次大戦のころ、イギリス・アメリカの連合軍は、武器をインドからミャンマーの上空を飛んで昆明まで空輸して、日本軍と戦う中国を応援したからです。ミャンマーは日本が押さえつけて地上での輸送は無理でしたから」

そういうことがあったとは知りませんでした。

「これを昆明出身の若い中国人は知らないのですよ。自国の歴史なのに。イギリスの若者も同じですが」

日本の若者も同じです。いえ、私も。

帰りしなに、

「ありがとうございました。また参ります」

「そのセリフ、”I will come back.”は誰のセリフでしたか？」

「あ、そうそう、マッカーサーでしたね」

笑いながらお別れしました。

この日の『デイリーパラグラフ』を私も買っていました。第一面の上の方にスポーツの写真が小さく載っているのですが、オリンピックではなくサッカーでした。スポーツだけの特

集が24ページも折り込みで入っていましたが、オリンピックに関する記事は最後の方に2ページだけでした。オリンピックがヨーロッパやアメリカでテレビ観戦できるように、韓国では夜の8時ごろに競技をやる、と聞いていたのですが、ヨーロッパの人たちの関心はサッカーの方に向けられているようです。テレビのニュースも一番初めはEU 離脱についてでした。日本ほど熱狂していません。

本の紹介のページではハリー王子と結婚予定の Meghan Markle さんについて本を書こうとしている伝記作家の言葉がありました。「平民の William 夫人に続き、今度 Meghan さんが皇室に入ること、エリザベス女王はとんぼ返り、宙返りをしたいくらいの気持ちでしょう。これで皇室はしばらく安泰だね。ある王室関係者も僕と同じ意見でしたよ」

「天皇は宙返りしたいくらいの・・・」という表現は私たちには考えられません。それにアフリカ系の方が皇室に入ることを、皇室が国民に受け入れられるという点でプラスと見ている王室関係者の先を読む目の柔軟さとしたたかさを感じました。

2月14日（水）

町を歩くと子連れの人たちが目立ちます。学期半ばの一週間のお休み、ハーフタイムだそうです。マヤの保育園ではこの期間、旅行する家族が多いのか、3人しか来ていなかったそうです。

「あれ、マヤ、お昼のお弁当を全然食べなかったの？」と、夕方、フェデリカがびっくりして言いました。

「そう。昼食室に入れなかったから」

保育園が準備した暖かい昼食を大きい子たちと一緒に luncheon hall で食べたかったのに、ハーフタイムのために給食は無しだったのです。ちなみにマヤの好きな給食は金曜日のフィッシュ・アンド・チップスだそうです。フィッシュ・アンド・チップスなんかが好きだなんて、イギリスの子になってしまうのだなあと感じてしまいました。ほんの少しの園児の様子を先生たちが気が付かないはずはなく、きっと保育園でも「我が道を行く」を貫いてお弁当を食べなかったのでしょう。

この期間に一週間の休みを設ける必要があるのかしら、と感ずてしまいますが、来年マヤが小学生になると仕事のある啓たちはこの期間をどうやりくりするか、頭が痛いでしょう。もしかして私にしわ寄せが?! 啓の大学もフェデリカの大学もハーフタイムは無いそうですが、昔、二人が通っていたノリッジの大学はあるそうです。私は新鮮なことを聞いた気持ちになりました。すべてを文部省が決めてしまうのではなく、大学それぞれに決定権があるっていいなあと感ずたのです。

2月16日（金）

昨日、近くのオーガニック・ショップに卵を買いに行きました。

「あ、マヤのお祖母ちゃんでしょう？」と即座に言われました。昨年、一度だけフェデリカ、マヤと入った店です。アジア系の方は少ないから覚えられたのですね。でも、今日は近くの

フィッシュ・マーケット（といっても小さな魚屋さんが一軒）でアジア系の女性を見かけました。くるまエビを一匹ずつひっくり返し、胴体を指でつまんで鮮度を確かめていて、その日は天ぷらをするつもりでしたが、エビはあきらめました。タラの子（マコ）とサバを一本買いました。甘辛く煮込んだマコのおいしかったこと！ サバは竜田揚げにして、これも美味でした。

2月17日（土）

一週間の疲れがでたのか、昨晚は啓が、今朝はフェデリカが熱を出しました。月曜日までには直ってほしいです。フェデリカが寝ている間、啓とマヤはホットケーキを作っていました。マヤは粉や卵をかき混ぜたり、フライパンにお玉ですくい入れたりして、出来上がったときに、

“Mummy will be proud of me.”と言いました。

この **proud** という言葉を持つ英語圏の人たちに羨ましさすら感じます。親が私のことを **proud** していると言ってくれたら、自分の存在そのものが認められた安心と喜びを感じたと思うのです。

フェデリカを静かに寝させるために、啓と私はマヤを連れ出し、ジョンルイスというデパートでお昼ご飯を食べました。この3階建てのデパートは、エスカレーターが一階から二階までしかなく、それもガタガタと音を立ててうるさいのです。使えるものは最後まで使い切ろうという質実な気風を感じます。日本のデパートはどうしてあんなに大きくてきらびやかなのかしら？ このデパートは小さくてもほとんどすべての品物が並べてあります。日本にあってこのデパートに無いものはデパ地下です。食堂もこざっぱりしていますが、豪華ではありません。家族連れ、夫婦、老婦人それぞれ見ていて楽しいです。三世代の家族のテーブルで、若いお父さんがウエイトレスに言っていることが聞こえてきました。

「この二人の子供（5，6歳）に、一人前を半分ずつにして持ってきてほしいのですが、2枚のお皿に初めから一人前という風に盛り付けてくださいますか？」

老婦人はきれいなセーターにネックレスをして、姿勢よく、優雅な雰囲気を漂わせていました。たかが買い物、誰も私を見ていないからとなりふり構わない自分と対照的でした。

私が頼んだスープにはパンがついていて、それを半分、マヤのお皿に載せておきました。マヤは自分のチョコレートアイスクリームを啓にも私にもスプーンを差し出して食べさせてくれました。

マヤが何やら啓に話し出し、**sharing** という言葉だけが聞こえました。

「え？何って言ったの？」

『パーちゃんは”**Sharing is caring.**”を学ぶべき』だって』

「ほら、マヤ、ちゃんとパンをマヤのお皿に置いておいたのよ。**Sharing** しているじゃない？」

ここで少し悲しい顔をしました。パンをもうもらっていることに気付かず、アイスクリームをあげたのに、パンをくれないパーちゃんに、**Sharing is caring.**を教えてあげなければと



いう気持ちが強かったのです。それなのに私に先を越されてしまったからです。

「マヤ、ありがとう。その言い方、知らなかったわ」

「マヤは、言葉の先生だからなあ」と啓。

マヤは深く、二度、頷きました。この表現は保育園で習ったのでしょうか。

マヤは私に対して、目上の人、対等の人、目下の人と使い分けています。折り紙をして遊んだときは、私はすごいことができる“目上の人”でした。マヤのおもちゃで遊ぶときは対等です。ちょっと座を離れて戻ると、“Did you been to the toilet?”という珍妙な英語で質問されます。はは～ん、保育園の子供たちはこんな英語を使っているんだ！ ”Sharing is caring.”の場合は、私を覚えの悪い子供のように思い、自分は先生のつもりです。



写真 2. デパートの食堂で

2月20日（火）

保育園から帰ってきたマヤに言われました。

「パーちゃんは毎日ここに来ているの？」

保育園から帰るたびに、私がまたやって来たと思っていたとは！ 何のために私が来ているのか不思議がっていたとは！

「ずっとお泊りしているのよ」

「本当の家に帰らないの？」

（そうねえ、帰りたいわ）

保育園から帰って来たフェデリカが言いました。

「グラマースクールの11歳くらいの小学生たちがちょうど保育園に来ていて、マヤは遊んでもらえて楽しそうだった。大きな子たちが好きだから」

同じ構内に保育園から高校まであるのです。

「マヤは一人っ子だから、年齢の違う子たちと遊べるのはいいことね」

「一人っ子が多い気がするのよ。中には3人もグラマースクールに行かせている親がいて、びっくりだけど」

先日、啓が言いました。

「僕らは、まあ、中流家庭かな。僕らのような家庭では、子供に良い教育を受けさせたいと思ったら、子供二人は無理なんだよね。こういう面ではイギリスは露骨だよ」

イギリスは階級社会だと聞いてはいましたが、富だけではなく、教育や教養レベル、ふるまいの差が子供たちにまで現れる社会のようです。学校が学期半ばの休みだったときに、近くの遊園地（ゲートが無いので誰でも行き来ができる）の中のゲーム・センターに入ったところ、2ペンス硬貨1枚で多くの2ペンス硬貨が狙えるパチンコのようなゲーム機がたくさんありました。一ポンド、50ペンス、20ペンス硬貨などから2ペンス硬貨への両替機があり、母親や父親が子供に両替させていました。要するにギャンブルのような行為を親子ともどもに楽しんでいて、違和感を感じました。そういうところに子供が出入りしたら、止めるのが親だと思うのですが。ゆとりのある人たちは一週間のハーフタイムの間、子供を旅行に連れていき、博物館、歴史的建造物巡りをして、子供は精神的な財産の積み上げが可能となりますが、“パチンコ”をして過ごす子供たちがいるのです。

2月22日（木）

テスコというスーパーマーケットに行くとき、船着場や華やかなブランドのアウトレットがあるガンワーフ・キーズを通って行きます。昨日はフランスから船で到着したばかりの中学生たちがいて、先生も生徒も私も英語が達者でない者同士での会話を楽しみました。今日はロンドン郊外に30年近く住んでいるという50代くらいの二人の日本人女性に会いました。ちょうどお茶を飲もうとしていたので、一緒にどうぞと言われ、カフェに入りました。「ね？ 前のお客さんたちのカップやお皿をいつまでも取りにこないでしょう？ イギリスはこんなよ。私たちが片づけましょう。日本みたいに良い所は無いわよ。イギリスは不便。なんでも時間がかかって、だらしなくて、もうしょうがないところよ」

でも、イギリスで育った友人の言葉を思い出しました。

「イギリスは地味で素朴で不便で、でもなぜかちょっといけてる！？ ところですよ」

そうそう、「いけてる部分」があるのに！ 帰宅して啓にこの話をしたら、

「そう！ 僕は子育てを日本ではしたくないなあ。こちらは小さい子供がいるとみんなの目がとても暖かいよ」

バスで小銭の持ち合わせがなく、紙幣でのお釣りをドライバーさんが持ってなかった時、乗客たちが小銭を出し合って、啓夫婦のバス代を払ってくれたそうです。

この二人の女性は、日本食をどう確保するかを教えてくださいました。

「～～まで車を走らせてごらんなさい。～～という韓国系のお店があって、そこで一通りのものは手に入るから。そこはいじめられないから」

「え？ “いじめられる”って、どういうことですか？」

「ほら、韓国人は日本人を嫌うじゃない？ 今のオリンピックでもひどいじゃない、日本人は粗末に扱われて。でもそこのお店は大丈夫」

え？ オリンピックで何があったのかしら？

昨日、ゴードンさんと交わした会話を思い出しました。ホロコーストの話をしていました。「どうしてユダヤ人はあんなに嫌われたのでしょうか？ イエスを殺したのはユダヤ人だったからという説明がありますけど、納得できません。だってイエスもユダヤ人だったでしょう？ またヨーロッパでは、土地所有を認められなくて、商人として生きるしかなかったユダヤ人が裕福になり、ねたまれたという説明も聞きましたが、これも納得できないです」

「僕も『なぜだろう』といつも思っています。ユダヤ人も、イギリス人や日本人と同じように、良い人、悪い人、いろいろいるのに、十把一絡げに良くないイメージで見られてしまいましたね。今でもそうですよ。無知、歴史への関心の無さがこういうイメージを容易に信じてしまう土壌ですね」

滞在期間の短い私にとって、イギリスの「いけてる」部分は、触れ合う人たちが私を日本人としてでなく、地元の人と同じ扱いをしてくれることです。昨日の昼は、ポーツマスから少し離れた町のグラマースクールの生徒たちによるミニ・コンサートが教会でありました。始まる前に、サンドイッチとお茶を入り口で買いました。品の良い女性が親切に果物やサラダもどうぞと、手に唾をつけて本のページをめくるようにしてナプキンを一枚取り上げて、くるんで渡してくださいました。衛生的ではないこの動作、何気なくなさっていて、私を特別扱いなさらず、かえって嬉しかったです。最後の生徒はベートーベンのピアノソナタを見事に演奏しました。私の前に座っていた男性がぐるりと振り向き、“Incredible! Talented!”とおっしゃいました。「あなたはどこの国の人ですか？」の質問がなくて、一緒に音楽を楽しめてよかったですね、の気持ちが快かったです。

「日本人を十把一絡げにした見方って何かしら。ここでは日本人はどう見られているのかしら？」

「そうだなあ、“礼儀正しい”かな。日本旅行から帰って来た人もそう言うよ。これ、違うよっていつも言ってるんだけど」と啓。

「1862年の日本からの使節団も礼儀正しい人たちって評されたのよね。日本の身分制度を土台とした秩序ある行動が几帳面で真面目、礼儀正しいという印象を与えたと思うのだけど、今は何かしら？ 私たちはよくお辞儀をするからかしら。ただ『ありがとうございます』の言葉だけでは足りない気持ちがして頭を下げるものね」

「それなら僕はもうその習慣から抜け出してしまったなあ。学会発表で日本からやってくる教授にも頭を下げずに挨拶しているし。ところで教授はどうして助手を引き連れてくるんだろう？ 自分一人の発表なのに」

2月23日（金）

今日 3 時から保育園で子供たちがステージで何かパフォーマンスをするので、みんなで行きましょう、と言われて楽しみにしていました。ところがよりによって今朝、またマヤが熱を出してお休みとなりました。保育園の先生や子供たちを観察したかったなあ、学校ごっこをすると「Mrs. Moore のオフィス（園長室）に行きなさい」のセリフに出てくる Mrs. Moore に会いたかったなあ、園長室に行かされるやんちゃなアイザック君にも会いたかったなあ。子供たちはどういう出し物をするのかなあと残念です。

一昨年のクリスマス時には DVD が制作され、子供たちの様子を楽しみました。でも昨年は DVD はなくなりました。ひとりでも反対する親がいたらやめるという方針に切り替わり、自分の子供をスマホで撮っても、それをフェイスブックなどに投稿しないこととされたそうです。

マヤがまじまじと私を見つめてまた言いました。

「ずっとここにいるの？」

「ううん、もう少ししたら東京に帰るよ」

前は「トウキョウってなに？」と言っていたのが、今回は、

「オウコ（「りょうこ」と発音できないのです）のいるところ？」

娘はクリスマスごろにポーツマスに来てマヤに会っているのです。

「そうよ」

「どうやって行くの」

「飛行機よ」

「わたしもノンナのところに行くときは飛行機に乗るのよ」

「イタリアに行くときは飛行機にちょっとだけ乗るでしょ？ 東京へはずっと乗って行くのよ」

啓がこの会話に気が付いて、地球儀のようにになっている提灯を持ってきました。

「このピンクの色のところが、今、マヤのいるところだよ。あ、イタリアもピンクだね。日本はほらこんなに遠いんだよ。青色に塗ってあるこの国だよ」

「ピンクもブルーも私の好きな色！ この黄色いところは何」と中国を指さしました。

「ここは他のどの国よりも人がたくさんいるところなんだよ」

「そう、ジョンルイス（デパート）みたいね」

2月26日（月）

お土産に持ってきた魚釣りのゲームをマヤは気にいって、よく私と遊びます。

「本当のおうちに帰るとき、これ持って帰るの？」

「ううん。これはマヤのだよ」

「ああ、そうなの！ ジャダディやマミーともこれで遊べるのね」とにっこり。

啓の大学では教職員が一週間のストをすることになり、今週の水曜日まで授業はありません。

せん。こういうことは啓にとって初めてだそうです。政府が年金減額を決めたので、退職金増額を要求してのストだそうです。学生たちの組合もあり、このストを応援しているそうです。教職員の待遇が悪くなればは教育のレベルが下がるという理由だそうです。この一週間分の授業が再来週、再々来週にしわ寄せされるそうで、これもまた大変そうです。

「政府は教育への出費を控え、いったい何にお金を使いたいと思っているのかしら」

「赤字を出さないように、という姿勢があるんだよね」

でも啓は今日、やはりバースに仕事に出かけました。中国からの留学生ばかりのクラスがあって、彼らは勉強したいだろうから、ということでした。今日は啓が家にいてくれるものとばかり思っていた私は当てが外れました。風邪の菌をもらってしまい、私も熱を出してしまいました。フェデリカは学校を休めず、私が保育園お休みのマヤを見ることになります。

(2018年2月26日 律)